

●栗山町のメロンの話

◎有名メロンの誕生に 周辺地域の姿あり

メロンといえば、誰しもご存知の「夕張メロン」。卸売市場における初売り価格は毎年ニュースとなり、石炭の黒いダイヤに次いで赤いダイヤと呼ばれるなど、目を引く存在です。おいしさも抜群で、食べごろになるにつれ、日に日に漂ってくる芳醇な香り、二つに切るとぱつとオレンジ色が咲き、それをスプーンでなめらかにすくって口に運ぶと、甘さのみずみずしさが広がり、思わず皮の際まで食べてしまいます。

メロンはキュウリやスイカ、カボチャなどの仲間でウリ科といいますが、メロン、ハミウリ、マクワウリ、シロウリ、カッラウリは同じ学名で、「メロン」と総称されます。アフリカ西部ニジェール川流域が起源地とされており、各地に広がりました。日本へは二世紀頃にマクワウリが東周りで入ってきていますが、これはあまり甘くないもので、現在のメロンのような甘い品種は十九世紀後半に西洋から日本に入ってきました。そして各地で品種改良が進められていきます。

特に冒頭で取り上げた「夕張メロン」は、アメリカからの「スパイシー・カンタロープ」を父とし、イギリスから伝わった温室メロン「アールス・フェボリット」を母として掛け合わせて作られた一代交雑品種です。品種名は「夕張キング」と名付けられました。そしてこのうち夕張市で種取り・栽培し、夕張市農協が基準を設けて出荷しているものが商標登録され、「夕張メロン」というブランドになっています。品種としては昭和二十六年に、商標登録は平成五年に行われました。

ただ、品種改良にも、そして地域の産品として生産し販売にこぎつけるまでにも長い時間が必要で、その間には近くの地域でもこのような美味しいメロンが栽培され産地化する可能性がありました。

また、人間でいう兄弟間の見た目や性格の差異のように、親が同じ系統であるため夕張キングという品種に似ているものの、少しだけ違う性質をもつ品種もあります。これらをまとめて「キング種」といいます。逆に同じ品種でも、作る地域が異なれば土壌や気象条件の違いがあるため、まったく同じものはありません。

そして時代が変われば、違った性質が求められ、全く新しい系統も生み出されていきます。実際、一強ともいえる夕張メロンというブランドだけでなく、ふらのメロンやアサヒメロン、らいでんメロンなどもあり、赤肉メロンといえば北海

道という現在のイメージを作り続けています。

このように、その産地だけでなくさまざまな場所や人、時代によって行われてきた、品種改良や栽培技術の向上があったからこそ、現存するブランドが確立しているという捉え方もできるでしょう。その地域の一つである栗山町のメロン栽培をここでみていきたいと思います。

◎栗山町における メロン栽培のはじまり

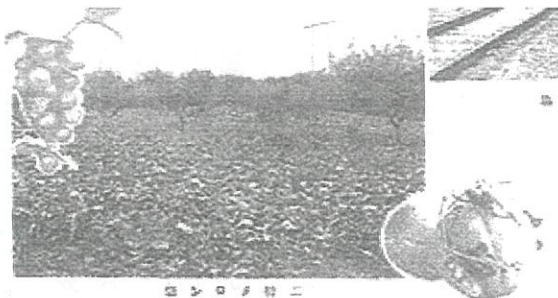
北海道のメロン栽培の始まりは定かではありませんが、明治時代とされています。栗山町でもスイカなどと一緒にそのころから栽培されていたようですが、当時は自給用で詳しいことはわかっていません。記録に残っているのは大正十二年で、他の北海道の産地と比べても初期にメロンを導入していた地域といえます。

それが「二股メロン」です。『夕張市史』の夕張メロンの歴史にもこの名が書いてありますが、実はこの「二股」とは、現在の栗山町継立地区から夕張市に向かう道の途中にある二手に分かれる部分の地名でした。より詳しく言えば、阿野呂川とエキモアンル川が合流するあたりです。ここで川筋が二つに分かれることから「二股」と呼ばれ、後にこのあたりは「二岐」と書かれます。この地域は当時夕張郡登川村でしたが、炭鉱の盛り上がりとともに登川村の人口が増加し、明治三十年に二股から南側を栗山町の前身である角田村へ編入することとなりました。ここは現在栗山町日出地区となっています。角田村の中心部から見て日が昇る東側にあることから、昭和十年には「日出」という地名に改名され、以降この地域のメロンも「日出メロン（日出メロン）」と呼ばれるようになりました。

記録が残っていると書いた大正十二年は、日出地区の小作農であった小林栄吉や小野寺与惣吉、滝沢米次郎らが中心となってメロンの試作を始めた年とされています。品種はアメリカから持ってきたスパイシー・カンタロープで、早生種であつたため、まだハウス栽培が一般的ではない時代に、寒冷地の北海道でも露地で栽培することができました。これが日本に渡った背景には、メロン好きで知られる大隈重信が関わっていました。大正中期頃に政府要人が渡米した際にお土産に日本に持ち帰ったこのメロンを大隈は絶賛し、北海道農業試験場に種子を持ち込みました。そのうち十粒ほどが北海道農業試験場にも配られ、当時日出の組合長であった小林に数粒が分与され、地元

の気候・地理条件に合うと見て、栽培を始めます。

◎二岐メロン・日出メロンの特徴



二岐メロンとその圃場の様子
（「夕張鉄道全線完成記念写真帖」より）

このスパイシー・カンタロープという品種は、ネットがかからず「ひだ」がある見た目で、果肉は固くて甘みが少ないという、今のメロンからは想像できない特性をもっていました。切ると中身は赤肉で芳醇な香りがあるという特性は品種改良により今に活かされています。一方、前述した、後にかけ合わせるようになる温室メロンとは、当時静岡県下で多く栽培されていたアールス・フェボリットのことで、ネットが綺麗に張り、甘みの強いメロンです。大正十四年にイギリスより持ち込まれました。これと交配した一代交雑品種が北海道に適した新品種のメロンになるだろうと予測され、北海道農事試験場や夕張市の農家など各地で品種改良が進められていきます。栗山町では、小林がこの道庁による露地メロンの原種ハウスを利用して、品種改良に取り組み、地元でも技術指導など普及にも携わっていました。実際、農家が栽培して「二岐メロン」「日出メロン」として販売していたメロンは、最初はスパイシー・カンタロープでしたが、のちにこうした品種改良した品種も作るようになっていったと考えられます。当時の二岐メロンは右の写真のような姿で、よく見るとスパイシー・カンタロープの特徴である「ひだ」があります。栽培も写真のように露地で行っていました。

現在にあるような温室メロンとの一代交雑品種であるキング種のメロンは、戦後に改良が盛んとなり、ハウスの本格的な導入が行われた昭和三十年代後半以降に姿を現します。

◎組織的な販促が功をなす

何より日出地区は販売に関しても積極的に動いたことで、他地域に先んじてメロンの産地として名をはせたといえます。当時高級品であったメロンの現地で消費はそれほど伸びなかったため、試食会などの販促によって都市部への販売を伸ばしていきます。

栽培開始から数年で市場に出荷できるまで成功し、注文は殺到して東京や九州にまで出荷するに至ったと当時の栗山町の農協資料に記載されています。

（裏面へ続く）

昭和期にはいると、換金性のあるメロンの栽培が拡大し、販売にも更に力を入れていきます。特に、昭和五年の不況では価格が半減してしまったため、より一層のメロンの宣伝に力を入れることとなりました。ここで大きな役割を担ったのが、「日出園芸組合」という農家の組織でした。当時、日出地区の農家は夕張という大消費地への野菜供給を行っており、大正十年には日出園芸組合の前身である「二岐蔬菜出荷組合」を設立しています。

昭和十九年には名前を変えて、日出園芸組合となりました。この組合として、札幌の三越での宣伝や、小樽市で開催の北海道博覧会での試食と即売会等を行い、好評を博します。左写真は、看板にあるとおり「日之出メロン出荷事務所」で、樽にメロンを詰めて出荷していた日出園芸組の当時の様子を知ることができます。

戦時体制に移行する中でメロン生産は衰退しますが、戦後は復興し、以前から日出地区で取り組まれ、知識や経験の蓄積のあった一代交雑品種栽培が大きく前進します。

この一代交雑品種で、昭和三十年には日出地区の川岸正雄が農林大臣賞を受賞するという名誉に輝きました。



日出園芸組合の
「日之出メロン出荷事務所」

◎蔬菜先進地としての発展で影が薄れる日出メロン

その後、高度経済成長を迎えた日本では、昭和三十七年からの農業構造改善事業によって農業の生産性の向上や自立経営農家の育成などが目指され、その一つとして需要の伸びていく作物生産に移行するという選択的拡大がなされていきます。当時、メロンだけでなく広く蔬菜の生産が盛んであった日出地区は、蔬菜栽培の主産地に指定され、翌年にはビニルハウス三十二棟を先駆的に導入しました。他地域でもビニルハウスが普及していき、これ以降、北海道ではビニルハウスによるメロン栽培が一般となります。高度経済成長によってメロンの需要も伸びていきますが、これに逆走するように日出メロンという名は聞かなくなっていくます。

ちょうどこの時期、昭和三十五年には夕張市で夕張メロン組合が設立され、翌年の昭和三十六年に夕張キングを品種登録し、夕張メロンが誕生します。

これには土壌条件の違いと経済状況の変化が関係しています。日出地区は褐色森林土に覆われ、メロンというよりも野

菜全般に適した土壌でした。また、水田もあつたことから、メロンに特化せずとも営農できる地域でした。そして野菜の産地として早くから札幌の市場にも販売先を確保し、夕張市場の縮小にも対応できるようになっていたのも一因です。

一方の夕張市では、昭和四十年代以降の相次ぐ炭鉱の閉山を機に、地元産業の大部分を支えていた石炭鉱業から農業に力を入れ、地域再生を図っていきます。この中で特化した作物が、アスパラガスや長芋、そしてメロンでした。これには夕張の火山によって作られた水はけのよい土壌が根拠となっていました。メロンは乾燥しており、かつ寒暖差のある地域で糖度が高くなるのです。山間部で水田にも不利で、野菜の育ちににくいという厳しい条件下で市や農協を挙げてメロン振興に取り組んできた結果と言えます。そうした産地の販売に押されて日出メロンの栽培は縮小していきました。

◎栗山町で広く作られるように

ただ、栗山町で完全にメロン栽培がなくなったという訳ではありません。昭和二十年に拓北農兵隊の入植でできた東山地区でも、メロン栽培が始められます。この地区も夕張市同様、水田にも不利で、家畜飼育にも適さなかった土壌と地理的な条件から、この周辺で栽培されていたキング種のメロンを導入し栽培を本格化させました。一時は東山メロンというブランドを作り札幌市場などで好評を得るなど、メロン栽培に独自に特化していきました。

また、東山以外の他地域でも、メロンの栽培が行われるようになります。これは昭和四十年代後半からの減反による影響で、水田だけでなく複合的な経営のために高収益作物が加えられるようになり、栗山町ではその一つとしてメロンが選ばれました。栗山町農協では、蔬菜の一つとして日出の出荷組合で扱っていたメロンを部会として受け継ぎ、昭和五十六年に「栗山メロン組合」を設立します。

当時は昔ほどメロン種子の入手が難しくなくなり、このように各地域でのメロン栽培が盛んに行われるようになります。この結果、一時メロン市場が過剰傾向に陥りますが、栗山町農協は夕張キングという品種を扱い、品質向上による市場での差別化を図りました。

しかし、昭和五十年代に入ると、栗山町では六価クロム汚染によって農産物全体に風評被害を受けてしまいました。

また、その後のバブル期には、ギフトとしてのメロン、特に北海道の夏場の味覚としての赤肉系ネットメロンの需要が高まっていました。が、「くりやま夕張キングメロン」という品種名を冠したブランド名を使ったところ、名称取り下げの要請を受けてしまいます。

このように向かい風の状況が続きましたが、これを打開すべく、早生のキング種に加えて、晩生のレッド種も扱うことで出荷期間を延ばしました。レッド種の

栽培に力を入れるため、農協では平成三年に「くりやまメロンサッポロレッド部会」を立ち上げ、サッポロレッドの栽培を行います。その後、レッド種でも早生のルピアレッドも加え、平成十一年に「くりやまメロン生産組合」に改名します。ここではキング種の「くりやまメロンキング」に次いで作られたという意味で、レッド種を「くりやまメロンクイーン」と名付けました。現在、キング種の扱いは東山地区以外ではなくなり、農協では晩生のレッド種を棚持ちのいい他のレッド種に転換して、「くりやまきんぐクイーン」という名前になっています。

◎多様な栗山農業を形作るメロン生産

現在（令和二年時点）の北海道におけるメロン栽培は、九百二ヘクタールで行われていますが、この四分の一にあたる二百三十三ヘクタールものメロンを栽培しているのが夕張市です。夕張市は全体の作付面積の七十二パーセントがメロン栽培であり、経営体数では九十七パーセントにあたり、夕張農業におけるメロンの存在の大きさがわかります。一方の栗山町のメロン栽培は、七ヘクタール、経営体数は二十六です。最盛期に比べると、メロン作付面積が減少し、他地域のメロン産地化が進み、相対的に存在が小さくなりましたが、さまざまな作物が栽培できる栗山町の一つの品目として、多様な栗山農業を形作っています。

		栗山町	夕張市	北海道
全体	経営体	323	114	27,112
	作付面積[ha]	5,047	325	532,532
メロン	経営体	26	111	1,451
	作付面積	7	233	902
割合	経営体	8%	97%	5%
	作付面積	0%	72%	0%
全道に占める割合	経営体		26%	
	作付面積		8%	

メロン生産概況
(2020 農林業センサスより)

企画展のご案内

●古写真の片隅に見つけた栗山

「もう一つ画像から伝わる情報」展

「新収蔵資料」展

【期 間】 3月15日まで

●資料の寄贈について

町開拓記念館では栗山の歴史や産業・文化に関する地域の資・史料を収集しています。何かお気づきのものなどがあればご連絡ください。

【問い合わせ】

町開拓記念館 ☎0126035

(執筆者)

栗山町農業振興公社 星野 愛花里

(監修)

栗山町開拓記念館 研究員 青木 隆夫
栗山町教育委員会 発行